



2021年秋冬号

- 加西分館「古代鏡展示館」秋季企画展「象嵌—象る／嵌める—」
- 新たな受贈!増築!そして再開! 広く、新しくなった古代鏡展示館の楽しみ方
- 秋季特別展「屋根の上の守り神—鷗尾・鯨—」
- 古代米づくりプロジェクト
- 企画展「ひょうごの遺跡2022—調査研究速報—」

加西分館「古代鏡展示館」秋季企画展

「象嵌 —象る／嵌める—」

期間: 令和3年9月18日(土)~令和4年3月13日(日)

場所: 加西分館「古代鏡展示館」(加西市豊倉町飯森1282-1)

金属工芸の代表的な技法には、彫金(金属の本体を彫る)、鑄金(溶かした金属を鑄型に流し込む)、鍛金(金属の板を槌で叩いて延ばす)の三つの種類があります。

このうち彫金技法は、金属の表面に鑿で紋様や文字を彫刻したり、切削によって造形して装飾効果を高めたりする技法です。そして、意図する図案の溝や凹みを本体の地金に彫り、金、銀、銅などの金属や多彩な貴石を嵌めこんで意匠をあしらい、色彩を強調する彫金技法を「象嵌」と呼びます。

中国では、商代(約3,700年前)以降、優れた鑄金技術による壮麗な彝器(祖先を祀る青銅容器)が盛行します。こうした重厚な作品の陰に隠れていますが、青銅器の生産が始まる二里头文化(約4,000年前)の前後には、緑松石(トルコ石)をモザイク状に象嵌した飾り板や武器が登場し異彩を放っています。その後、春秋時代(約2,800年前)には青銅器に金銀銅の金属の線や断片を嵌め込む精巧な象嵌が施され、戦国時代(約2,500年前)にはさらに細緻で壮麗な象嵌作品が創出されました。

今回の展示では、緑松石や孔雀石などの貴石や金銀銅の金属を象嵌した銅鏡や帯鉤(ベルトのバックル)を中心として、壺や鼎(煮炊具)、弩機(弓の発射装置)などの作品を出展いたします。

(加西分館 種定淳介)



金銀緑松石象嵌帯鉤【戦国】



孔雀石象嵌透彫鏡【戦国】



銀象嵌雲気紋樽【戦国】

新たな受贈！ 増築！ そして再開！

広く、新しくなった古代鏡展示館の楽しみ方



5月13日(木)、増築工事のために昨年9月から閉館していた古代鏡展示館は、広く、新しくなってオープンいたしました。ここでは再開した古代鏡展示館の注目ポイントを3つのキーワードにまとめてご紹介いたします。

キーワードは「2・3・∞」！

■キーワード「2」・・・展示室が2倍に



増築された第2展示室の建物(左側半分)

今回の工事で、これまでの第1展示室とほぼ同規模(約180㎡)の第2展示室を増築し、展示面積が2倍になりました。そのため展示作品数も約2倍になり、今まで以上に多くの作品を鑑賞していただけます。

■キーワード「3」・・・新しい3つの展示



華やかな第2展示室内部

増築により、第1・第2展示室の二つの展示と、企画展示の三つの展示が可能となりました。

第1展示室 テーマは「青銅の時代」。青銅器が作られるようになった二里頭文化期(夏)から青銅器文化最初の盛期といわれる漢・三国時代までの中国古代の青銅器や鏡を展示しています。

奥の大きなケースは、夏・商(殷)から秦・漢にいたる古代中国の金工の歴史を紹介するコーナーに一新しました。

第2展示室 テーマは「唐王朝の精華」。中国青銅器文化の第2の盛期といわれ、王朝文化が開花した隋・唐代の逸品を展示しています。時代の雰囲気に合わせて、第1展示室よりも明るく華やかな展示室となっています。



加彩舞女子俑
(千石唯司氏所蔵)

豪華な宝飾鏡や精巧な金銀器、華麗な三彩俑等の隋唐を代表する逸品を鑑賞していただけます。入口で優美な舞を披露する舞姫「加彩舞女子俑」が皆さんをお迎えます。

企画展示 企画展示ケースを中心に、テーマを替えて年2回開催します。

■キーワード「∞」・・・楽しみ方は∞

令和2年度に新たに133点の作品を受贈したことにより、当館が所蔵する千石コレクションの総数は500点となりました。また鏡だけでなく、容器や剣などの青銅器や金銀器、墓に納められた人形の俑など、古代中国の多彩な作品の数々を展示できるようになりました。

中国古代の素晴らしい技巧や芸術的な表現、作品に使われた材料や色彩など、気になる箇所は人それぞれ。多くの作品から時代を感じるのも、お好みの作品をじっくり鑑賞するのも、楽しみ方は∞(無限大)です。

展示室が広くなり、新たに受贈した作品も加え、より展示が充実した古代鏡展示館を、お時間のゆるす限りお楽しみください。

(加西分館 村上賢治)



秋季特別展「屋根の上の守り神 — 鴟尾・鯨 —

期間：令和3年10月2日(土)～11月28日(日) 場所：特別展示室

屋根の王者 鴟尾

鴟尾は、屋根の頂部の両脇に反りを持たせるひととき大きな屋根飾りです。東大寺の大仏殿を思い浮かべると、その屋根には金色に輝く飾りがあることに気づかれるのではないのでしょうか。この鴟尾は中国の晋代(3～5世紀)に現れたようです。「鴟尾」の文字は「鴟の尾」を意味し、鳥が連想されます。また、水の精を表したものとされることもあり、中国でも早い段階で様々なイメージが交錯していました。

日本には朝鮮半島から仏教が伝わり、飛鳥時代に寺院が造られるようになるなかで、屋根を覆う瓦の一部として鴟尾も伝わりました。飛鳥寺跡などで出土した初期の鴟尾は、鳥の尾の形に近いものです。

鴟尾のイメージが明確に定まったものではなかったため、文様が簡略化されたり、仏教にゆかりの深い蓮華の文様が加えられるなど、各地域で様々な装飾された鴟尾を見ることができます。

平城宮などの宮殿に鴟尾が使われるようになると寺院での使用は少なくなり、平安宮の中樞施設が再建されなくなると平安時代のうちに鴟尾は姿を消してしまいました。

城の象徴 鯨

鯨といえば天守の頂上に載せられた飾りのイメージが強いですが、日本に現れるのは鎌倉時代と考えられています。中国では唐代に「鴟吻」というものが現われました。「吻」は口を意味し、鴟尾の形に獣の頭が表現されたものや、獣頭魚体の鯨に似た形のものがあります。これが鎌倉時代に日本に伝えられたと考えられます。しかし、現存する中世の建物には鯨を載せるものはほとんどなく、あまり普及はしなかったようです。

鯨が広く使われる契機となったのは、天正7年(1579)に完成した安土城において金箔で飾られた鯨瓦が使われたことによると考えられています。織田信長配下の城や天下を引き継いだ豊臣秀吉の城にも使われたことから、鯨といえば城の象徴ともいえるものになりました。名古屋城の金鯨はその代表例で、姫路城には数多くの鯨が現存しています。江戸時代には寺院や神社にも多く使われるようになりました。

鴟尾や鯨が何を表し、何に由来したものなのかはいまだ謎が大きいです。その時々の人々によって多様に表されてきたその姿をご覧いただきたいと思います。(学芸課 池田征弘)



鴟尾 高丘3号窯出土 明石市蔵 県指定文化財



鯨瓦 姫路城 姫路市立城郭研究室蔵

古代米つくりプロジェクト

当館では、平成20年より博物館ボランティア、播磨町立蓮池小学校と協力して、博物館の実験水田で米の栽培を行っています。栽培品種は、対馬赤米と種子島赤米の2種類の古代米と壱岐黒米、比較資料として播磨町で一般的に栽培されている品種ヒノヒカリとハリマモチです。

苗は県立農業高等学校の授業の中で育苗していただきました。今年は6月23日に蓮池小学校5年生の児童の皆さんと博物館ボランティア、館職員の総勢180名で田植え作業を行いました。児童の皆さんは、初めて入る田んぼの感触に戸惑ったり、足をとられて苦勞をしたりしながらも、田植え作業を楽しんで進めていました。

(参加した児童の感想)

「初めての田植えを経験しました。田んぼの中は泥でとても歩きにくかったです。何度も転びそうになりました。今はいろいろな農業の機械がありますが、昔の人の大変さがよくわかりました。秋のイネ刈りも楽しみにしています。」

イネは10月中旬に収穫予定です。それまで大切に育てていきたいと思います。成長の様子は、ホームページやインスタグラムなどで発信していきますので、ぜひ、ご覧になってください。

(学習支援課 山本真弘)



一列に並んでみんなで田植え



深く、しっかりと植えました

企画展 ひょうごの遺跡2022 —調査研究速報— 令和4年1月15日(土)~3月13日(日)

兵庫県が実施した発掘調査と出土品整理事業から、最新の調査成果を公開する展覧会です。

今回は令和2年度に刊行した発掘調査報告書に掲載した藤井古墳群(豊岡市)、波賀野遺跡・波賀野西遺跡(丹波篠山市)、宮ノ谷遺跡(洲本市)と、当館が所蔵する出土品の中から、県指定文化財を中心とする選りすぐりの出土品を展示します。

(学芸課 菱田淳子)



波賀野遺跡出土縄文土器



藤井1号墳
第1主体出土遺物

兵庫県立考古博物館NEWS vol.28 2021 Autumn-Winter

発行年月日 令和3年9月15日

編集・発行 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1
TEL.079-437-5589
FAX.079-437-5599
<https://www.hyogo-koukohaku.jp/>

- 電車をご利用の方／JR土山駅南口から「であいのみち」を徒歩15分
山陽電車播磨町駅から喜瀬川沿いを徒歩25分
- お車をご利用の方／第2神明・加古川バイパス明石西I.C.から約3km
※自家用車でお越しの方は町営大中遺跡公園駐車場(64台/有料)
もしくは町営野添であい公園駐車場(60台/有料)をご利用ください。
イベント等の実施により混雑する場合がありますので、ご注意ください。
- 休館日/月曜日(祝休日の場合は翌平日)



触れる・体感する、考古学のワンダーランド
兵庫県立考古博物館

